

## 作品集発行にあたって

伊達市長 須田 博行

「伊達市民憲章作文コンクール」は、今年度初めての取り組みとなります。次代を担う市内の小中学生の皆さんが、作文を通じて市民憲章の意味を理解し、自分の将来や伊達市の未来について考えることで、ふるさとへの愛着心を育みながら心豊かに成長してほしいという願いを込めて実施しました。

伊達市民憲章は、平成二十八年一月一日の伊達市合併十周年を機に、まちの一体感をつくりあげ、目標を共有し、ともに力を合わせてより良いまちづくりを進めていくための行動規範になるよう期待し、作られたものです。

今回は、市民憲章の一文である「まもりましょう ふるさとの自然と歴史を」をテーマとして作品を募集したところ、小学生部門と中学生部門あわせて六二〇点もの応募がありました。どれも地域の歴史や文化を継承していくことの大切さや、自然環境保全に対する強い思いなどがいきいきとした文体で書かれた素晴らしい作品ばかりでした。

伊達市民憲章には、市民一人ひとりが自分のまちを良くするために、「自分にできる良いこと」を具体的に自覚し、それをできる範囲で実行しようとする姿勢を育む役割があります。応募作品を読みながら、小中学生の皆さんが、市民憲章の基本をよく理解し、「伊達市の未来をより良くするために自分たちが何をすべきか」と、真剣に思いを巡らせている姿勢に感動しました。

本書が多くのの方々の目に触れることで、伊達市民憲章をより身近なものとして感じ、ふるさと伊達市への愛着が一層高まることを願っております。

結びに、このコンクールを実施するにあたり、ご指導いただいた先生方、また、審査にあたっていただきました皆様、そして、ご協力いただきました関係者の方々に感謝を申しあげ、挨拶といたします。

# 目次

作品集発行にあたって

伊達市長

須田 博行 1

## 小学生の部

5

### 【最優秀賞】

伊達市のいいところ

保原小学校 六年 高城 若葉

### 【優秀賞】

私のすばらしいふるさと伊達市

保原小学校 五年 佐藤 愛美

伊達市の歴史と共に

伊達小学校 五年 諏訪 幸也

未来へのバトン

伊達小学校 六年 瀬戸 穂香

歴史と自然と思い出を守る

上保原小学校 六年 山田 芽依

【佳作】

守りたい大立目の伝統

大田小学校 六年 大槻あまみ

柱沢の四季

柱沢小学校 六年 角田 羅唯

霊山町の自然と歴史

掛田小学校 六年 熊倉 愛子

よみがえった盆踊り

小手小学校 六年 齋藤 颯斗

中学生の部

【最優秀賞】

人々の手が支える未来

霊山中学校 一年 菅野 愛莉

【優秀賞】

職場体験学習で知った「ふるさとの自然と歴史」

伊達中学校 二年 三浦 日向

ふるさとの自然

松陽中学校 二年 神田 七海

新オラトリオ

桃陵中学校 二年 齋藤 雄大

守っていくべき伊達の自然

月館中学校 二年 三浦 千穂

【佳作】

私たちが守る伊達市の緑

伊達中学校 一年 佐藤 亜月

小さな庭の大きな未来

伊達中学校 三年 佐藤 七冲

自然豊かな伊達市

松陽中学校 一年 高橋 和暉

ふみ出す一歩

月館中学校 一年 関根 蒼海

講評

審査委員長 高野 保夫 28

伊達市民憲章

30



# 小学生の部





## 最優秀賞

### 伊達市のいいところ

保原小学校 六年 高城 若葉

わたしは、東京に遊びに行ったときにうれしいことがありました。東京のデパートの食品売り場で、見つけたものがあります。それは、伊達市で作っている桃のジュースです。たくさん商品がある中で、見たことのあるピンク色の缶のデザインが目にとまり、うれしくてお母さんにも教えました。遠くはなれた東京に伊達市で作られている桃の商品が売られていることがほこらしく思え、多くの人に買ってほしい気持ちになりました。

伊達市にはおいしい果物がたくさんあります。一年を通して桃やりんご、さくらんぼなどいろんな種類の果物を楽しむことができます。また、果物だけでなく野菜もたくさん種類がとれます。わたしはトマトが大好きです。トマトはいつもお店で買ってきませんが、家でトマトを作っている人から、たくさんもらうときもあります。伊達市はおいしい果物や野菜を作っている人がたくさんいて、他の地域の人に自慢できる部分だと思いました。わたしは静岡に四年生と保育園のいとこがいます。毎年、桃やりんごのおいしい季節におばあちゃんが送っています。「桃おいしかったよ。」と、いところから

電話がかかってくるとうれしい気持ちになります。今年の夏休みは、福島に来なかったので一緒に遊ばせませんが、来たときは伊達市のいいところをたくさん見せたいと思います。

前に、いとこたちが伊達市に遊びに来たときは、保原総合公園にいきました。いとこたちは保原総合公園の大きいすべり台におどろいていました。一緒にすべり台を何回もすべりました。みんなで旧亀岡邸も見ました。わたしは、学校の遠足で旧亀岡邸について勉強していたので、旧亀岡邸の歴史について教えてあげました。亀岡邸は、明治三十年頃に建てられた亀岡政元氏の住宅で養蚕製造など営み、議員も務めた人です。今は伊達市保原町歴史文化資料館と併設され、公開されています。平成八年に福島県指定文化財、平成二十八年に国の重要文化財に指定されました。みんなで遊べる公園の中に、このような歴史的建物があるという場所は少ないと思います。静岡から来たいとこたちに伊達市のすばらしい公園と歴史ある建物を見せることができました。

東京で伊達市の桃の商品をみつけてうれしかったこと、静岡のいとこたちに伊達市のいいところを見せてほこらしかったこと、など、伊達市のいいところを誰かに知ってもらうことはこんなにうれしいことだと気づきました。わたしが住んでいる伊達市は自然豊かで食べ物もおいしい、歴史のあるいい町です。最近テレビで東京にアンテナショップを出す県が増えてると聞きました。伊達市のいいところをそういうところから発信できればいいと思います。

## 優秀賞

### 私のすばらしいふるさと伊達市

保原小学校 五年 佐藤 愛美

私は、伊達市のことや生まれ育った保原町についてあまりきょう味がなかったので知ろうとも思いませんでした。だから、資料を集めて調べました。

伊達市は、平成十八年一月一日に、伊達町、梁川町、保原町、霊山町、月館町の五町が合併して誕生しました。この年は私が生まれた年でもあります。まだ、十一年しか経っていません。十一年で何が変わったのでしょうか。

昔は、養蚕業が盛んだったことを知りました。蚕種（蚕の卵）は、日本一の品質をほこり全国に販売されていました。そして、伏黒、梁川は蚕種せい造、掛田はせい糸、保原は真綿せい造と地域ごとに特色をもっていました。蚕は、えさである桑を一日に何度もかけたり病気になるないように室内を清潔にしたりします。また、成長に必要な温度管理も大切です。何千年もの長い間人間に育てられてきたので、人の世話なしには、生きられないということが分かりました。私の曾祖父や曾祖母も養蚕業をしていました。蚕をかいこ様とよんでいてとても大切に育てていたということを知りました。身近に昔のことを知っ

ている人がいるということは、とても貴重なことだと思いました。

伊達市内には、たくさん歴史遺産・文化遺産があることを知りました。種まゆ標本、蚕当計、つつこ引き祭り、保原薬師堂・旧亀岡家住宅、梁川城跡・本丸跡出土品など指定文化財になっているものも百二十件あり、未指定の文化財も数多くあるようです。こんなにも多くのものが保存されていることに私はおどろきました。文化財の中には実際に見てふれたこともあり、とても勉強になりました。

伊達市は、自然に恵まれた緑豊かなことを知りました。指定文化財になっている霊山は美しい紅葉で知られています。四季折々に移り変わる風景を身近で見ることが出来ます。桜から始まり、田んぼでは青々としたイネが成長し、黄金色に変わってお米が実ります。畑では、野菜や果物の花が咲き、おいしい実がなります。私は、曾祖父が作るとれたての野菜や果物を食べたことが何度もあり、とてもみずみずしくておいしかったです。また、お手伝いをたまにすることがあります。種まき、水やり、桃の袋かけやいもほりもしました。お手伝いをしてる時は、自然や季節の恵であることを感じているのに気づきませんでした。伊達市に生まれ育ったことをとても幸せだと思っています。

このように私が生まれ育った伊達市はとてもすばらしいふるさとだと思います。すばらしい自然がいつまでも続くようにこれからは私たちが努力しなければなりません。だからもっともつとふるさと伊達市のことを勉強して知りたいと思います。そして、伊達市のよさを全国に広めていきたいと思っています。



# 伊達市の歴史と共に

伊達小学校 五年 諏訪 幸也

昨年六月五日、四年生だったぼく達はふるさと会館のステージに立っていた。伊達市合pei十周年記念式典で、制定されたばかりの伊達市民けん章を発表するためだ。伊達市が合peiした年に生まれたぼく達、伊達市と同じ十才のぼく達が選ばれたのだ。伊達市民の代表として発表するので、ぼく達は伊達市民けん章を毎日唱えて練習した。特に、ぼくが担当した言葉は、「一・まもりましようふるさと」の自然と歴史を」だった。この言葉は伊達市民けん章本文の一番初めの言葉である。

平成十八年に、伊達町、保原町、梁川町、霊山町、月館町の五町が合peiして伊達市がたん生した。それぞれの町に歴史があり、その歴史と関係したお祭りがある。ぼくが住んでいる伊達地区には、長岡天王祭がある。三年生の時に総合的な学習の時間で長岡天王祭について調べた。調べてみたら、ただの楽しいだけのお祭りではないということが分かった。今から百三十年前、長倉村と岡村が合peiして長岡村になり、それぞれの村にあった八雲神社と熱田神社がいっしょにお祭りするようになったのが長岡天王祭の始まりだ。だから、長岡天王祭では二人の神様に感謝の気持ちを表して、笛やたいを鳴らしたり、八つの山車が集まったりするのだ。ぼくは、二

つの村が合peiしても二つの神社両方を大事にするほど、昔の人達が仲良く暮らしていたのだなと思った。長岡天王祭は、伊達地区の歴史や昔の人達が心を一つにして守ってきたお祭りなのだ。

合peiして大きくなった伊達市には、長岡天王祭のような歴史と伝統を伝えるお祭りがたくさんある。保原地区のつつこ引き祭り、梁川地区のふる里夏祭り、霊山地区の霊山神社春季例大祭、月館地区の小手姫の里夏祭りなどは特に有名だ。ぼくもこれらのお祭りに参加したり、テレビのニュースで見たりしている。しかし、ぼくは長岡天王祭ほど他のお祭りの始まりや由来を知らない。伊達市の他の小学生もぼくと同じかもしれないと思う。

生まれた時から伊達市民のぼく達。ぼく達がまず自分の住んでいる地区の歴史を学ぶこと、その歴史を他地区の友達に伝えることが大切だと思う。ぼくはぜひ長岡天王祭の歴史と昔の人達が大事にしてきた思いを紹介したい。また、ぼく達が他地区の歴史や伝とうも学ぶことが必要だと思う。おたがいの歴史を知ること、同じところやちがうところが分かり、伊達市の小学生として仲良くなれると思う。

現在、夕方五時になると伊達市全地区で伊達市歌のやさしいメロディがながれている。伊達市歌は伊達市民けん章と共に作られた。伊達市民けん章と伊達市歌は、伊達市の新しい歴史のシンボルである。

## 未来へのバトン

伊達小学校 六年 瀬戸 穂香

私が今住んでいる「伊達市」は、自然にめぐまれた、緑豊かなところ。また、由緒ある祭りや風習が今なお存続している、歴史あるところでもあります。そんな伊達市には、「伊達市民憲章」というものがあります。これは、緑豊かなふるさととの歴史と伝統にほこりをもち、協働の精神でさまざまな困難をのりこえ、健康で安心してくらせる活力ある「伊達なまちづくり」をめざして定められました。私は、この伊達市民憲章を通して、感じたこと、必要だと思っただけがあります。それは、伊達市というふるさとを大切にし、自然と歴史を、未来へ守り継いでいかなければいけない、ということ。そして、必要だと思っただけは、伊達市の歴史や、祭、災害を通して学んだことを次の世代へと伝えていく人が伊達市に居続けることです。

私は未来へ伝えていきたいことがあります。その一つが「長岡天王祭」です。この祭りは熱田神社と八雲神社で行われ、天王様を信じれば、悪い病気にかからないというので、多くの人たちがお参りに来ます。山車が八台出て、とてもにぎやかです。また、屋台もたくさん出るので、家族や友達と一緒に来る人たちで、とてもにぎわっています。桶に水をくんで帰り、家族一同で飲むと、その年は病気が

をしないと信じられ、災難除けの祭として、みんなに愛されています。私は天王祭の中で、「稚児」として、熱田神社、八雲神社、そして、各方部でおどっています。その他に、太鼓をたたく人、笛を吹く人がいて、先生や先輩方から、

「太鼓のリズムはこうだよ。笛はこうやって吹くんだよ。おどる時は、足をきれいにひろげておどるんだよ。」

と、やさしく教えてもらってできるようになっています。これから、今まで教えていただいたことを、自分達が伝えていく使命があると思っています。また、私が未来へ伝えていきたいことが、もう一つあります。それは、二〇一一年三月十一日、午後二時四十六分に起こった「東日本大震災」です。これは震度六弱という、ものすごく大きな地震でした。この地震で、多くの建物がこわれ、多くの人が傷つきましたが、みんなで助け合って、今ではもとの生活にもどることができました。この時、災害のおそろしさを感じたと同時に、みんなで助け合うことが、いかに大切かということ学びました。

来年からは、私も中学生になります。今度は、私達の世代が守り継いでいく番です。これからも、自分のふるさと伊達市を大切にしたい、一生懸命次の世代へと伝え、守り継いでいきたいです。伊達市の素晴らしい自然と歴史が百年先、千年先、ずっとずっと先の未来まで、バトンが繋がっていくことを願って……。

## 歴史と自然と正しい出を守る

上保原小学校 六年 山田 芽依

わたしがまもりたいふるさとの自然と歴史は、淡島神社と白雲洞です。

淡島神社は、慶長十六年（一六一一年）法印境宥教が薬師如来と共にこの地に奉祀したと伝えられています。淡島様とは粟の栽培が上手なことから名付けられました。五穀豊穡の神様として信仰されています。淡島神社では、四年に一度、山車を従えてお祭りを開かれます。そこで、私達は、太鼓をたたきます。

淡島神社では、四季折々の景色が楽しめます。春は、桜が満開に咲きほこり、夏は、虫の鳴き声やおいしげる葉、秋は、イチョウなどがみられ、冬は、一面、真っ白な雪景色になります。私はどの淡島神社の景色も好きです。私は毎年いろんなことをしています。特に冬には、足あとがひとつもないサラサラな雪で雪だるまを作って遊んでいます。

私の母や祖父も淡島神社でたくさん遊んだそうです。淡島神社は何十年も前から愛されています。

二つ目に守りたいのは、白雲洞という岩です。

淡島神社の参道を登っていくと、白雲洞につきます。参道の両側には石塔が建ち並んでいます。

白雲洞は、まだ淡島神社があるところが、海だった時に自然につく

られたものです。白雲洞のゴツゴツとした巨岩の岩穴には、観音菩薩、阿弥陀如来、薬師如来が祀られています。白雲洞の横には、大きな鐘があり、大みそかは、いつも鐘をならします。

白雲洞には登ることができ、一番高いところから見る景色はすぐきれいです。近くの建て物や遠くの建て物まで一望できます。晴れている時は、遠くがはっきりと見えます。

秋には、どんぐりや松ぼっくりが落ちているし、葉が赤く色付いた木々がきれいです。いとこや姉や弟と秘密基地をつくって遊んだこともあります。そこらじゅうにくりやサンゴに似た木の枝が落ちています。たくさん自然と思い出がある白雲洞は大切にしていきたいです。

私は、これからも、自然がいっぱいで、歴史ある、淡島神社と白雲洞を守っていきたいです。

それに、四年に一度のお祭りやお祭りでやっている太鼓も大切な行事なので守っていきたいです。

最近、淡島神社に参拝に来る人も少なくなってきましたが、少なくとも私は、出来る限り淡島神社に行きたいと思っています。白雲洞が高子二十境に指定されているので、淡島神社や白雲洞に来ている人が増えていくとうれしいです。

特に来年は山車が出る本祭りです。がんばって太鼓をたたき、お祭りを盛り上げようと思います。自分のできることを続け、ふるさと上保原の自然と歴史を大事にしたいです。

## 佳作

### 守りたい大立目の伝統

大田小学校 六年 大槻 あまみ

私が住んでいる大立目には、八幡神社があります。八幡神社では、十月の中頃に「八幡様祭典」というお祭りが開かれます。三人ぐらいでおみこしの中に入って、太鼓をたたきながら、大立目の方部を歩きます。

私が、このお祭りの太鼓の練習をやりはじめたのは、一年生のころでした。きつかけは、近所の六年生が、

「一緒にやろうよ。」

と声をかけてくれたからでした。もし、声をかけてもらえなかったら、きつとはずかしくて、参加できなかつたと思います。私はその日から、お祭りの太鼓の練習をやり始めました。

最初は、きんちょうとはずかしさで、同じ方部の子どもたちとも、話ができませんでした。しかし、年上のお兄さんやお姉さんが、話しかけてきてくれたり、お世話をしてくれたりしたので、少しずつ話ができるようになり、仲良く活動できるようになってきました。だんだん楽しいという気持ちが大きくなってきました。私は小太鼓でした。小太鼓は同じリズムで、ずっとたたたくので、難しかったです。しかし、お兄さんやお姉さんが私の手を持って、一緒にたたいてくれたり、私の前で、お手本を

見せてくれたりしたので、少しずつ上達してきました。演奏できるようになると、もっと、もっと楽しくなってきました。上手になってくると、地域のおじさんたちも、

「うまいね。」

とほめてくれたので、さらにうれしくなりました。

二年生になると、大太鼓の練習もするようになりました。ばちも太くなるので、まだ小さい私の手では、持つのが大変でした。それでもがんばって練習していると、また、「うまいね。」とほめられました。そして、練習が終わるとごほうびにジュースがもらえました。練習の後に飲むジュースは、本当においしかったです。家に帰るとお父さんが、アドバイスをしてくれるので、ますます楽しくなりました。学校に行っている間も、太鼓の練習が待ち遠しくなりました。

しかし、こんなに楽しいお祭りの練習なのに、一年たつごとに、一人減り、二人減りと、人がだんだん少なくなっています。私が一年生のときは、子どもたちだけで、十人ぐらいは参加していました。しかし、今では三人から四人ぐらいしかいません。昔からずっと続けてきた、楽しいお祭りなのに。私は「このお祭りがなくなってしまうのではないか」と心配しています。だから今年の練習が始まるときには、私が声をかけてもらったように、

「一緒にやろうよ。」

と、声をかけたいです。そして、この昔から続けている「八幡様祭典」というお祭りをこれからも守っていききたいと思います。

## 柱沢の四季

柱沢小学校 六年 角田 羅唯

伊達市のぼくが通っている学校は、柱沢小学校。その四季折々に変わる風景は、とてもきれいです。

学校の近くには、「千本桜」という桜の名所があります。柱沢小学校は、小高い山の上にあるので、桜が満開になると、まるで桜の上に学校があるように見えます。この時期には「桜祭り」が開かれ、多くの人々が美しく咲き誇る桜を見に来るので、学校周辺はとてにぎやかになります。ぼくも桜祭りに参加しましたが、地域の人ばかりではなく、遠方から来てくださった方もいて、みんな口々に「きれいだね」「すごいなあ」と言っていて、見渡す限りの桜の風景を見つめていました。

この「千本桜」は、毎年、里親を募集しています。里親になった人は、名前が記された自分の木が健やかに成長するようにと願いながら世話をするのです。子どもが産まれたときに里親の登録をする人もいるので、きつと、家族の健やかな成長も願っているのではないのでしょうか。正しくこの「千本桜」は、ぼくの故郷の象徴なのです。夏になると、「霊山太鼓祭り」が開かれます。伊達市は、太鼓が盛んなところです。梁川町や霊山町には、有名な太鼓のチームがあります。もともと霊山子ども村で開催されていた太鼓祭りですが、

東日本大震災後は、保原町の大泉公園で行われるようになりました。去年は伊達市十周年記念でも盛り上がりました。何千人もの人が一斉に行う太鼓の演奏は、とても見応えがあつて迫力満点であり、見る人を感動させます。ぼくは、この太鼓祭りが終わると、夏も終わりに近づいたんだなあと感じます。

秋には、田畑の稲が実りをむかえます。水田一面が、どこまでも続く黄金色のじゅうたんに変わり、とてもきれいです。東日本大震災以前、ぼくは毎年おじいちゃんの家で稲刈り手伝いをしていました。水田は、一辺が百メートルもあるので、稲刈りするのは大変です。震災後は放射能の影響を考えて機械で稲刈りをするようになりました。なかなかお手伝いができなくて、とても残念です。

冬になると、雪がたくさん降ります。伊達市の冬の食材としては、あんぽ柿が有名です。ぼくの住んでいる町でも、毎年冬になると、あんぽ柿のオレンジ色のカーテンをたくさん見ることが出来ます。震災の影響で出荷できなくなり、しばらくの間このカーテンを見ることができませんでした。しかし、最近になって出荷が再開し、とてもおいしい故郷の特産品が再び食卓に並ぶようになりました。

伊達市は、四季折々の移り変わりが美しく、おいしい食べ物もたくさんあります。ぼくは、改めて「伊達市に住んでいてよかった」と思います。これからもっと伊達市が大きくなって、さらに素晴らしいものが産まれてくる、そんな故郷になればいいなあと思います。

## 霊山町の自然と歴史

掛田小学校 六年 熊倉 愛子

私の住む、福島県伊達市霊山町には、自然と歴史がいっぱいあります。山や川、鳥、虫、動物、草、花など、たくさん自然があります。霊山町は山に囲まれているため、夏はとても暑いですが、そのかわりに、たくさん自然があります。青々とした葉や緑が多く、とてもいい町です。

まず、はじめに、霊山町には「霊山」という歴史ある山があります。千何百年という歴史あるこの山は、上のほうに「奇岩」があり、その周りには、たくさん緑があります。霊山の持ちようは、大きな奇岩があることです。昔、この霊山は、火山の山の一つでした。山の登り道を進んでいくと辺りには噴火した当時の岩石など、たくさん歴史や、自然を感じられます。火山ばいや、岩石などをさわることができません。とてもめずらしいことです。夏は緑豊かで、青々とした葉や、花、鳥、動物、虫などたくさん自然が見つけられます。秋には、葉が紅葉し、赤やオレンジ、黄色など、たくさんきれいな色で、山が染まります。太陽が、霊山にさした景色はともきれいで感動しました。また、霊山には、登山道があり登山ができます。毎日、霊山に登山しに来る人も多いし、霊山町のクラブで登ることもあります。私も何回か登りました。最初は楽なのですが、上の方

に行くと、坂道が急だったたり、大きな岩のところを歩いたり、ロープをつたって、がけのところを歩いたりなど、とてもたいへんです。それでも、たくさん自然や霊山町の景色など、とても楽しいことや、感動することばかりです。霊山は私のふるさととても大切なものの一つです。

また、他にも霊山町には、自然がたくさんあります。朝にお母さんと歩く散歩道には、花や植物などが、たくさんあります。りんどう通りの坂道を登っていくと、夏はハイビスカスのような大きな花が、白、ピンク、赤など色とりどりで一面にずらりと咲いています。また、他の家の畑には、とうもろこしがたくさん植えられています。六月には、あじさいも咲いています。そこには、ちょっとした公園もあり、そこから、茶うす山という山が見えます。秋に紅葉した茶うす山を公園から見ると、とてもきれいです。また、向かいが墓地になっていて、私の家の墓は、一番上の高いところにあるので、そこから、霊山町をながめることができます。茶うす山の後ろには、天気がいい日には、霊山が見えます。たくさん自然が、見つけられていいなと思いました。

この作文を通して、霊山町には、歴史と自然がたくさんあることを、改めて実感できました。これからも、大好きな霊山町にある、たくさん自然と歴史を守っていききたいと思います。

## よみがえった盆踊り

小手小学校 六年 齋藤 颯斗

今年の夏、ぼくたちの地域では何十年ぶりかで盆踊りが復活しました。お母さんが子どものころは毎年あったようですが、ぼくにとっては初めての経験です。近所の若い人たちが実行委員になって復活の計画を立てました。

さっそく六月から、たいこや笛の練習が始まりました。毎週土曜日の夜に、ベテランのおじちゃん達に習いました。ぼくも弟と小だいいこの練習をしました。最初は竹をたたいてリズムを教えてもらいました。難しくて最初は楽しくなかったけれど、だんだんできるようになってきたら、本物の小だいで練習できるようになりました。大人の人もおだいで練習できるようになってきました。大人の人もおだいで練習できるようになってきました。

実行委員には、お父さんも入っていたので、前から準備や計画を立てていたそうです。地域づくり支援員の野村さんやその友達も、昔はどういうふうな祭りに進んでいたかよくわかって近所のおばあさんやおじいさんに聞いて、やたいを用意してくれました。ぼくは、やたいがあるだけでもイメージが変わったと思います。他にも大人や地域の消防団のみなさんが盆踊りで使われるやぐらを作ってくれました。立派なやぐらでビックリしました。建設現場で使うパイプを

つなぎ合わせて作ったそうです。ぼくたちが見えないところでも、駐車場の整備で手伝いに来てくれた他の地域の方もたくさんいました。公民館では消防団の方たちが、生ビールやジュースや焼き鳥の出店をして活やくしていました。実行委員長が消防団にたのんでくれたので消防団中心にがんばっていました。ぼくが祭りを楽しめたのは、見えないところでがんばっている人たちがいたからだと思いました。とちゅうで雨が降ってきたにもかかわらず、お客さんがどんどん増えてきました。しだいに雨もやみはじめて盆踊りが始まりました。ぼくは、小だいをたたきみんなを集めてたたき準備をしました。委員長の合図で盆踊りのスタートです。たいこの音がひびきわたります。みんなが楽しく踊っている中、雨がまた降りはじめました。そして委員長から

「盆踊りはこれで終わりにしたいと思います。次はちゅうせん会があるので移動してください。」と、指示がありました。

ちゅうせん会は、ぼくは当たらなかったけれど、みんなが笑っていたので楽しかったです。

盆踊りは、ただ楽しむものではなく先祖のたましいに贈る踊りだそうです。しかも遠くの親せきやなつかしい人なども来てくれる絆を感じる機会です。これからは、ぼくたちが伝統を受けついでいて、ぼくたちからもこれから伝統を教えていけるようにしたいと思います。







# 中学生の部





## 最優秀賞

### 人々の手が支える未来

霊山中学校 一年 菅野 愛莉

どの場所でも、自然や歴史は守り継いでいかななくてははいけません。どの場所でも、人々が豊かに暮らすための努力をしていかななくてははいけません。

私が住む伊達市も同じです。伊達市には、霊山太鼓まつりや桃畑などがあります。また、健幸都市実現のための取り組みも行われています。これらを続けていくには必ず人々の手が必要となります。太鼓をたたく人の手、桃を育てる人の手、健幸都市を計画し実行する人の手など、人々の手があれば守り継いでいくことや豊かに暮らすことができるのです。

だからと言ってその手が少なすぎると、支える力が小さく、長く続けることは難しくなってしまう。だから、支える手の数を増やしたり支える手を減らさないようにしたりして、一人でも多くの手で支えないといけないのです。

そのためにまず、関心を持ってもらうことが必要です。広告やポスターで広める方法や会や講話を開いて広める方法もあります。また、自らインターネットで調べたり、周りの人に聞くことも、関心

を持ち、支える一歩につながります。私は霊山太鼓をしていて、そのきっかけは友達の紹介でした。そして、お祭りで太鼓をたたいているときに、私は霊山太鼓を守り継ぐ一人なんだと感じました。このような気持ちは、たくさんの人に伝わってもらいたいです。また、自分も支えているということを誇りに思ってもらいたいです。

このように、支えるということは伊達市の自然や歴史を守り継ぐうえでとても大切なのです。

ですが、自然を支えている人がいる一方、自然を壊す人もいます。これは、食べ残しの汁やごみを流す人のことです。私の家の近くに川があります。その川には、鳥や魚が人間たちのように豊かに暮らしています。しかし水と一緒に流れてきたごみなどのせいで、魚も鳥も減り水が汚れてしまったのです。このごみは人間が出したごみです。人間が伊達市を壊してしまつたら、支えている意味が無くなってしまいます。歴史も人が壊してしまつたら、守ってきた人達の苦勞の意味が無くなってしまいます。だから、自分が壊すものとなっていないかを見直す必要があります。

今、伊達市を支えている人の心の中には伊達市への愛があると思います。その愛があるから支えて続けているのだと思います。私は伊達市民として見習い、これから生かし伊達市の未来を支えるお手伝いができたらいいと思います。

## 優秀賞

### 職場体験学習で知った

### 「ふるさとの自然と歴史」

伊達中学校 二年 三浦 日向

僕は、今年の六月に学校の職場体験学習で伊達市役所伊達総合支所での仕事を体験した。その中でこの町の歴史や今の環境、これからの進化についてよく知る機会があった。

伊達市は、平成十八年一月に、伊達町、保原町、梁川町、霊山町、月館町の五町が合併して伊達市となった。その頃僕はまだ一歳で、ほぼ伊達市と共に大きくなってきたといえる。

伊達は昔、蚕種本場として全国的に知られ、明治・大正時代には「蚕都伊達」として、国内は元より海外にも知られるほどだったそうだ。梁川町の祖父母の家には、まだ大きな蚕小屋があり、昔使っていたと思われる古い道具もいくつか残されている。

さらに歴史は古く、伊達家発祥の地としても伝えられていて、市内には今も伊達家の風情ただよう史跡等が数々残されていたり、伊達の精神を受け継いだ祭りや伝統芸能などが継承されたりしている。伊達氏がこの旧伊達郡と関わった歴史は四百年余りもあるそう。で、知れば知るほど深い歴史のある土地なのだという事が分かり、誇らしい気持ちになる。

そして何よりも大きな魅力は、春夏秋冬、色彩豊かな景色と、豊かな自然が作り出すおいしい食物だ。桃や柿などの果物の他、米や野菜なども充実しており、たくさんの方の自然の恵みがいただける。

祖父母が作ってくれたお米や野菜や果物はどれをとってもとても美味しく、味が濃くて新鮮だ。母が良く言うのは、「生まれ育った場所で作られた物を食べるのが、その人の体に一番合っているんだって」という言葉だ。きつと育った土地の空気や水や土が自分の体にしみ込んでいるということなのかなと思う。

そして、それを感じるのは食物ばかりでなく、自分の住む町の景色も同じだ。遠くを見渡せば山が見え、町の中を悠々と川が流れて、近くには沢山の緑があふれている。自分にとって当たり前なじみのある景色も、改めて考えると、豊かな自然に囲まれた、誇らしい風景であることに気付く。

そして伊達市では、今後いくつかの大きな事業が予定されている。現在、町を大きく横切るように高速道路の建設も進められており、伊達市の古い歴史と新しい未来、どちらも大切にしていかなければいけないということだと思う。

職場体験を通して住む人皆がこの町の自然と歴史を愛し、大切にしようとする心を持つことが大切だと実感した。

## ふるさとの自然

松陽中学校 二年 神田 七海

私が生まれ育ってきたこの伊達にはたくさん自然があります。自然に囲まれていることで、その美しさや、すばらしさを学ぶことができています。

私は伊達の中で、特に好きな場所や、景色があります。

それは、「千本桜」です。私の家の近くにある、桜がたくさん植えてある場所のことです。ここが好きな理由は、桜が美しいことはもちろん、思い出深い出来事もあるからです。

一つは、小学校の卒業アルバムの写真を撮影したことです。咲き誇る桜をバックにとった写真は、すごくきれいで、初めて見たときに心を奪われてしまいました。

もう一つは、祖父との思い出です。毎年行われている桜の手入れのときに、祖父と私と弟とで写真を撮ります。年々成長していく私と弟ですが、祖父はあまり変わらないのです。変わらず元気な祖父のように、伊達の美しい自然も変わらないでいてほしいです。しかし、最近、久しぶりに千本桜へ行ったところ、ごみがたくさん落ちていました。お菓子やパンの袋、飲み終えたコーヒの缶……。とても悲しくなりました。あの千本桜がいつまでも美しくいられるよう、私自身ごみは捨てませんし、見つけたら拾えるように心がけて

いきたいです。ごみを捨てる人が一人でも減ってほしいと思います。他にも、黄金に輝く田、桃と草のにおいが混じった桃畑。そして明かりの少ないこの伊達だからこそ見ることが出来る星空。たくさん美しい場所や好きな場所があります。

しかし、つい先日、新しいコンビニエンスストアができました。自然が少しずつ減っていってしまうような気がしました。開発が進み、住みよい町になっていくことは、良いことだと思いますが、発展していく一方で、自然が失われることを忘れてしまっただけなのではないかと思っています。

私はこの町の自然が大好きです。だから、自然環境を守ることができるようにほんの少しでも力になりたいと思います。また、この伊達市が発展して行ってほしいですが、自然のありがたさを忘れずにいたいのです。そして、これからも自然を大切に作る気持ちを忘れずに過ごしていきます。この美しいふるさとが、いつまでも自然と笑顔であふれることを願っています。

## 新オラトリオ

桃陵中学校 二年 齋藤 雄大

毎年、お盆にある「伊達のふるさと夏まつり」の日は、祖母の実家の梁川町に親せきたちが集まって過ごします。お昼すぎからみんなで集まって、にぎやかに食事をして、みんなで広瀬川に灯ろうを流しに行つて、演奏や合唱・語りや太鼓などが共演するオラトリオを観賞して花火大会が始まる。このお盆の恒例行事は、母が子供の頃から続いているようです。

オラトリオには、僕が生まれる前に父と母も出演したことがあり、今年のオラトリオには僕のはとこと、はとこのお母さんが出演しました。

今年はずっと続いていたオラトリオの曲が変わり、内容も新しいものになりました。以前のオラトリオの曲は、「水のほほえみ」という曲でした。この曲は、昭和六十一年八月五日の大水害を契機に生まれた曲で、濁流の後に残された希望と勇気を胸に、川との共生を誓うふるさとの賛歌でした。ぼくはその中の、川の濁流を表現した太鼓と赤いふんどしのおじちゃんが出てくる場面が好きでした。すごく荒々しい感じで、洪水の恐ろしさが伝わってきました。

新しいオラトリオでは、毎年出てくる赤いふんどしのおじちゃんは赤い着物のようなものを着ていました。今までと曲も内容も全然

違うものだったけど、今回のオラトリオで前と違ういいところがありました。それは、子どもの合唱団がいたことです。新しいオラトリオは、伊達の歴史と未来を表現していると何かに書いてありました。伊達市の十周年を記念して新しくなったオラトリオは、伊達市五町のことや伊達市の歴史、そしてこれからの子どもたちの未来のことが歌になっていました。

最後は、子ども合唱団や歌手の人が、太鼓や演奏といっしょになって歌い、とつても大きく力強い伊達市歌になりました。僕も知っている伊達市歌は、今まで見たことも聴いたこともないようなカッコいい曲になって感動しました。

僕は、前のオラトリオも好きだったけど、新しいオラトリオも好きになりました。大洪水や、東日本大震災、いいことも悪いこともいろんなことがあった五町の歴史が、伊達市となって形を変えて、世代を変えて前に進んでいます。ぼくの家族のお盆の恒例行事も、子どもだった母が親になって、僕が生まれて、形を変えて僕たちが集まってお祭りに参加しています。僕は、オラトリオが新しくなったことで、伊達市の歴史を大切にしながら、これからの伊達市を僕たちの手で新しくかっこよく、みんなが仲の良い家族みたいな市にしていきたいです。そして、お盆の恒例行事を、僕が大人になって親になった時も続けていきたいと思いました。

## 守っていくべき伊達の自然

月館中学校 二年 三浦 千穂

私の住む伊達市は自然豊かな市です。春には菜の花や桃の花、桜が青空の下咲き誇り、桃の花が全盛期の頃は桃源郷のような風景を作り出す所もあります。夏はたくさん夏の虫達が飛びかう中、たわなに実る桃、そして一面に広がる水田からは夏の強い日射しの中で生き抜こうとする植物の強さを感じ取ることができます。秋は緑に溢れていた山々が朱色に染まり、私達に沢山の自然の恵みを分け与えてくれます。そして、冬も本番になり、大地一面に雪が降り積もり続け、自然が皆眠りにつき、月の光が雪を照らしている景色はまさに絶景としか言えず、昔の人が和歌に雪の情景を歌ったのも納得がいきます。

しかし、六年前の原発事故の被害によって伊達の自然と人々の関わりは変わってしまいました。原発事故が起こってから数年間、子供達は外遊びを制限されて自然と触れ合う機会が少なくなり、更に自然の恵みの一つである野草や木の実などが検査によっては食べられなかったりしてしまうことが今でも続いています。原発事故の問題以外にも、地球温暖化などの環境問題によって近い将来、伊達の美しい自然が失われてしまうかもしれません。

そんな現在と未来を私達中学生が少しでも変えることはできるの

でしょうか。伊達市民憲章に「まもりましようふるさとの自然」とあります。私はふるさとの自然を守るためには、ふるさとの自然に関心を持つことが一番だと思います。私が思うに、物事を改善するにはそれについて知っていかなくてはいけないと思います。しかし、普段の生活の中で自然について考える機会ほとんどありません。そこで私は、伊達の自然について考える機会を市や学校が設けることで、それを機に伊達の自然の現状について関心を持つことができるのではないかと考えました。

そんな風にまずは大人達が子供達に関心の種をまくことが必要だと思います。そして、子供達の中に関心の芽が生えてくる頃に、もっと具体的に、どうしたら自然を守れるのかということを子供達に実践させたりするのが効果的だと思います。

いくら一つの世代だけで自然を守りきっても、次の世代に移り変わった時に自然は危機に陥ってしまうのではないのでしょうか。それよりも、時間はかかっても全ての世代が自然に関心を持つことに時間をかけて、一步一步確実に次の世代へ受け継がれるような方法で守っていく方が人にも自然にも優しいと私は思います。

## 佳作

### 私達を守る伊達市の緑

伊達中学校 一年 佐藤 亜月

私は、自然いっぱいこの「伊達市」が大好きだ。学校へ行く道、友達の家までの道、近くのお店まで行く道。いつも私を通る道には、たくさん自然がある。友達の家までの道には、桃の畑がある。桃は伊達市を代表するフルーツだ。満開の桃の花は私の好きなピンク一色で、桜にもおとらない。満開の桃の花は、昔話に出てくる桜の絵のようだ。桃だけではない。各家庭でも花を育てていて、行く先々にも様々な種類の花が咲いている。愛宕山の緑も、とても美しい。日常に花があったり、緑があったり、あまり気にしたことがなかったけれど、こうして改めて考えてみると、常に自然にかこまれて生活できているということは、意外に贅沢だ。ビルの間に挟まれ、わざわざ緑を追い求める生活をしている人もたくさんいるのだ。緑の中に桃やりんご、柿などのさし色、緑のまわりに、蝶や鳥など、いつも緑をかざる自然の力が伊達市にはたくさんある。例えば、伊達市の箱崎愛宕神社では、毎年四月末にお祭りがある。四月末ということもあって、神社へ続く道は緑のトンネルだ。そのお祭りでは獅子舞が披露され、毎年たくさんの方が集まる。この獅

子舞は約四百八十五年前から始まったとされ、長い歴史をもっている。涼しげな笛の音、たくましい太鼓の音とともに披露されている獅子舞は私の心を魅了した。

今、伊達市では、東北最大の商業施設建設に向けた取り組みや、高速道路の建設が始まった。もちろんそのために家を移転する、木を切るなど、もともとあった自然や風景を失わなければならないということもある。しかし私はマイナスに考えてはいない。その周りにある自然と人造物が一体となり、伊達市の発展につながる、いわゆる「チャンス」だと考えている。もちろん自然が少なくなる。でもその分、自分達で守るべき物、得る物も増える。

ここ伊達市は、春に桃やりんごの花が咲き、夏の夜には満天の星空が広がる。秋には紅葉が美しく、冬には綺麗な雪景色。そんなすてきな景色を今まで伊達市の人々が守ってきた。そしてこれからも私達はその役目を果たさなければならぬ。

私は伊達市以外に住んだことがない。だからこの自然のある風景が「日常」だ。大きな商業施設もできる。伊達市に人も集まる。とても楽しみだ。発展する伊達市を応援しつつ、同時に緑を守りぬく。若い人達がこれを忘れてはいけない。



## 小さな庭の大きな未来

伊達中学校 三年 佐藤 七沖

私が生まれ育ち、今なお過ごしているこの伊達市。伊達市に住んで十五年目となる私だが、様々な事をここで学び、体験し、育ってきた。そんな伊達市であるが、私が思うに一番の魅力は今回のテーマでもある、ふるさとの自然だと思う。

私は小さい時から体を動かす事が大好きだった。空いている時間があったら、外で走ったりボールで遊んだりする。近くには小学校もあり、外遊びには最高の立地だ。学校へ通うのも友達の家へ遊びに行くのも、伊達市の自然である桃の畑や木々の緑の存在は大きかった。山の散策まではいかないまでも、緑に囲まれた道を移動したり散歩したりできる環境は都会にはないものだ。また、私の家には庭と池がある。伊達市の住宅は庭つきの家が多い。何メートルか先にくぐり隣の家がある。マンションぐらしの都会とは違う。家に庭つきなどとても贅沢だが、伊達市の自然がこれをあたり前にしてくれる。庭で遊び、家の畑の作物を食べることができる。我が家では春にフキノトウが採れ、夏には鯉といっしょに池に入って遊んだりする。秋には柿の実がなり、冬に雪遊びもした。幼かった私には庭という小さな自然が楽しくて、おもしろくて、とても魅力的だった。

六年前におきた東日本大震災。地震による地盤への影響こそ小さ

かったものの、福島原子力発電所での水素爆発によって私たちの伊達市も放射能による被害を受けた。庭のフキノトウは食べられなくなってしまう。水道水も汚染され使うことができず、池の水はにごっていく一方だった。秋には柿の実も食べられず、空から降ってくる雪には触れることさえもできなくなってしまった。私の知る自然がなくなった。それでも地域の皆は自然を取り戻すまで協力し続けた。除染であったり、子どもの外出をひかえたりと子供たちを守る地域のつながりが私の目にも強く映った。このようなつながりや努力が伊達町から続く伊達市の長い歴史というものを支え、形を作ってきたのだろう。

今の伊達市はどうだろう。高速道路の建設工事などが始まり、以前より機械や建物などが目立つ。これは一見、伊達市の自然を破壊しているかのようにとらえがちだが、私はそんな風には思わない。たしかに、近代化のための自然破壊にはつながると思う節があるが、伊達市を活性化させるためには必要なものだと私は信じている。都市の発展のために何かを得ようとすれば何かを失うのはあたりまえだ。それでも、これから生きていく未来において、伊達市の自然をできる限り残していく都市計画を実現してほしい。私が大人になってここを離れてしまっても、帰ってきた時に自然の中にも帰っていきける伊達市でいてほしい。

## 自然豊かな伊達市

松陽中学校 一年 高橋 和暉

ぼくたちが住む伊達市は自然豊かなところです。春、夏、秋、冬、四季に移り変わる風景は色とりどりです。皆さんは、四季折々の伊達市をすぐに思い浮かべることができるでしょうか。また、伊達氏発祥の地として、各地域で伝統ある祭りやコンクールなどの行事がたくさん行われています。さらに、伊達市特産の桃はとても甘く、全国的にも有名になってきています。

ぼくは、この伊達市の祭りや公園について調べてみました。その中でも特に人気があったのが次の三つです。

まず一つ目は大泉公園です。この公園は、大泉駅から徒歩一分ほどの場所にあります。ここでは、平成二十五年の夏にリニューアルイベントとして「元気はつらつプロジェクト」を開催しました。このイベントを行ったことで、大泉公園は、大いに賑わい、これをきっかけに大泉公園に来てくれる人がとても多くなりました。

二つ目は、「つつこ引き」というお祭りです。このお祭りは福島県の十大奇祭にも選ばれています。「商売繁盛・五穀豊穡」を祈る勇壮な祭りとして、毎年、三月の第一日曜日に行われ、市の無形民俗文化財にも指定されています。またこのお祭りは、子供の部と大人の部に分かれており、子供の部では、大きな長い綱を引きあい勝

負を競います。大人の部では、長さ3m、直径1.5m、重さ約八百キロのつつこを持ちながら巖島神社まで運びます。最後にこの餅を食べると一年健康に過ごせるといわれています。

三つ目は、梁川で行われる花火大会です。これは、福島県内二位の人気を誇り、また、地元の人達が毎年心待ちにしている夏祭りです。灯ろう流しから始まり、その後、スターマインや尺玉の連発など、約五千発の花火が打ち上げられます。毎年約二万五千人の人が見にきます。

そのほかにも、人が集まる場所はたくさんあります。自然豊かな伊達市ですから、春、夏、秋、冬、どんな季節にきても、楽しめると思います。

ぼくはこれからも、この伊達市を全国に広めていけるように、いろいろなボランティアに参加していきたいと思っています。

## ふみ出す一歩

月館中学校 一年 関根 蒼海

月館町に住む私の家は、美しい山々に囲まれています。緑豊かなこの町は、春夏秋冬で、それぞれ違った自然の風景を味わうことができます。

私は毎朝、自転車で登下校をしています。すると、捨てられているたくさんのゴミが目にとまります。よく見ると、空き缶やペットボトルだけではありません。ごみ袋がほうり投げられていたり、食べかけのお弁当が捨てられていたりするのです。私は、「せっかくの豊かな緑が、こわれてしまつては、もったいない。」そう思いました。そして、ポイ捨て増加の原因は、どこにあるのかを考えてみることにしました。「ゴミを見つけても見て見ぬふりをし、ゴミを拾わないのがいけないのではないか。」このように考える人は、少なくないと思います。私もはじめはこのような考えを持ちました。しかし、私はあるゴミの捨てられ方を思い出し、考え方を変えました。そのゴミは、目立ちにくいように草原のところに、まるでかすようにして捨てられていました。それは、ゴミを捨てた人が、多少の責任を感じたからではないでしょうか。このように思った私は、ポイ捨て増加の原因は、ゴミを捨てた人の責任感の弱さにもよるものだと、考えを改めました。

ポイ捨てをしてはいけないことはだれもが分かっていますが、ここまではみんな同じなのです。しかし、いけないと分かっていることを当たり前のようにしないと、分かっているけどしてしまつう人とは、全く違うのです。今ならまだポイ捨てをゼロにすることもできるはずですが、けれど、ポイ捨ての増加が進むのと同時に、このことは難しくなっていくきます。だからこそ、今のうちにポイ捨ての増加について見つめ直し、ゴミの処分の仕方を見直すことが必要です。まずは、始めの一歩をふみ出すことが大切です。ゴミがでてしまつのは仕方ないことで、止めることはできません。しかし、そのゴミをポイ捨てするのはまちがっています。ジュースの缶やペットボトル、食べかけのお弁当は、必要がなくなれば、自分の物ではなくなるのでしょうか。決してそうではありません。責任を持って持ち帰れば良いのです。そして、持ち帰つたゴミをきちんと分別することができれば、これは二歩目をふみ出すことになるでしょう。きちんとした分別をし、リサイクルすれば、必要なくなったゴミでも、必要のある物に形を変え生活の中に戻ってきます。このようにして一歩一歩を歩み続けることで、この町の自然を支えることができます。

私は、この作文を通し、この町の自然環境と向き合うことができました。だから私も始めの一歩をふみ出し、一歩一歩を歩み続けることで、月館町の自然を守つていこうと思います。

## 講評

審査委員長 高野 保夫（伊達市教育委員）

伊達市の市民憲章作文コンクールが実施されたのは、今回（平成二九年度）が初めてでした。伊達市民憲章は前文と本文（五行）とで構成されていますが、第一回の今年度は本文一行目の「まもりましよう ふるさとの自然と歴史を」というテーマでした。

募集にあたっては小学五・六年生の部門と中学生の部門とに分け、市内の小学生からは三七三名、中学生からは二四七名の応募がありました。審査の対象になったのは各学校から推薦のあった三八点の作品で、審査の結果、最優秀賞には小・中各一名、優秀賞には小・中各四名、佳作賞にも小・中各四名、合わせて一八名の皆さんが受賞されることになりました。

小学生部門の最優秀賞の高城若葉さんの作文は、東京のデパートで開催された福島県の物産紹介の会場で見つけた伊達市の桃のジュースのことから書き出し、公園の中の歴史遺産である旧亀岡邸と養蚕産業のことにつなげながら、ふるさとの再発見についてつづったものです。また、中学生部門の菅野愛莉さんの文章は、題名にも示されているように、伊達市の歴史や伝統行事、そしてそれらを将来に受け継ぐためには地域の人々の支え合いが必要であり、郷土への強い思いや愛が欠かせないということを「手」という言葉で

象徴的に表現しています。霊山太鼓祭りへの参加体験を踏まえてまとめているところが大事です。二人の作品は、文章の書き方や全体の構成が大変すぐれていました。

小学生部門の優秀賞と佳作賞を受賞した八名のうち、佐藤愛美さん、山田芽依さん、熊倉愛子さん、角田羅唯さんたちの作文は、伊達市の緑豊かな自然の景色や四季の変化の美しさ、地域の特産物としての桃や柿、あるいは伝統産業としての織物などを特産品として大事に守っていききたいということを中心にとめたものです。さらに、それらに加えて、霊山太鼓祭り、長岡天王祭、淡島神社や八幡神社の祭り、復活した盆踊りなど、各地域の伝統行事や祭礼なども大切に受け継ぎたいと書いているのは、諏訪幸也さん、大槻あまみさん、瀬戸穂香さん、齋藤颯斗さんたちの作文です。これらから、歴史的、文化的なものに対する小学生らしい興味関心のあり方を感じ取ることができます。

一方、中学生部門の優秀賞と佳作賞の作文はどうでしょうか。

東日本大震災や東京電力の原発事故などと関連づけながら、伊達市の自然環境や様々な風物、季節毎に変化する豊かな自然の風景、地域の特産物としての果物などは、どうしても大切に守るべきものとして捉えているのは、三浦千穂さん、神田七海さん、佐藤亜月さん、佐藤七沖さん、高橋和暉さんたちの作品です。また、関根蒼海さんは、身近なゴミ問題を取り上げながら、自然環境を保持していくことの大切さと難しさに触れ、地域社会の一員としてどうあるべ

きかを考えていますし、齋藤雄大さんは、広瀬川の灯籠流しや花火大会、音楽の祭典としてのオラトリオの時代的な変化を高く評価しています。さらに、職場体験学習を通して、各地域で代々受け継がれてきた祭礼の由来やふるさとの伝統産業であった養蚕業の歴史とその遺産などについても認識を新たにしたことを書いているのは三浦日向さんです。

これら中学生の作文に共通に見られることは、小学生の文章とはやや異なり、ふるさとの自然環境や歴史的、伝統的な遺産を保持することの難しさや重要性について触れるとともに、地域の現在や未来のあり方、あるいは変化する社会の今後の動向などについて強い関心を寄せていることです。

次年度は、市民憲章の本文の二行目の「つなぎましょう 世代の絆とたしかな信頼を」ということが課題になりますが、それに対して小中学生たちが果たしてどのような角度からテーマに迫っていくのか、いまから楽しみます。



# 伊達市民憲章

## ～心をひとつに～

わたしたちは、緑豊かなふるさとの歴史と伝統に誇りをもち、  
協働の精神でさまざまな困難をのりこえ、  
健康で安心して暮らせる活力ある「伊達なまちづくり」をめざし、  
この憲章を定めます。

一 まもりましょう

ふるさとの自然と歴史を

一 つなぎましょう

世代の絆とたしかな信頼を

一 そだてましょう

支えあいと思いやりの気持ちを

一 きずきましょう

学ぶ心とゆたかな文化を

一 めざしましょう

すこやかで活力のあるまちを



# 市民憲章の解説

【憲章名】 憲章名を「伊達市民憲章」とし、副題の「心をひとつに」という言葉は、伊達市が合併したときの「伊達 織りなす未来 ひとつの心」という表現に象徴されるように、旧町それぞれの個性を生かしつつ、「伊達市」として一体になろうという理念を継承したものです。

【前文】 本憲章は、私たちが誇りとする自然、歴史、文化、伝統を尊重・継承し、市民みんなの力で大震災、原発事故、人口減少に伴う社会問題などの困難を克服するとともに、地域も人も輝き、豊かで明るい未来をめざす伊達市の実現のために定めるものです。「伊達なまちづくり」には、誰もが健康で自分らしく生涯を過ごすことができるまちでありたい、という強い願いが込められています。

【本文】 子どもからお年寄りまで声に出して唱え、日々の暮らしの中で明確な目標を持ち、市民が協力、協調しながら実践しやすいよう、簡潔で親しみやすい表現にしています。「くましよう」という五つの呼びかけには、市民一人ひとりが主人公となり、希望あふれる伊達市の未来を積極的に創り上げようという思いが託されています。

## 一 まもりましょう ふるさとの自然と歴史を

豊かな自然環境と、先人が築いてきた歴史、文化、伝統を大切に守り、それらを生かしたまちづくりに努め、心豊かに生活できるふるさとの実現をめざします。

## 一 つなぎましょう 世代の絆とたしかな信頼を

世代の垣根を越えて人々が連携し、望ましい信頼関係を築き、創意ある取り組みで地域の活力を生み出し、規律を尊重した安全・安心な地域づくりをめざします。

## 一 そだてましょう 支えあいと思いやりの気持ちを

自らを高め、地域ぐるみでお互いを支え合い、安心な子育てを実現し、住み慣れたふるさとで自分らしく明るく暮らせる社会づくりをめざします。

## 一 きずききましょう 学ぶ心とゆたかな文化を

教育や文化を尊重し、読書に親しみ、生涯を通して学べる教育環境を充実させ、広い視野に立つて行動し、地域を活性化できる創造的な人材の育成をめざします。

## 一 めざしましょう すこやかで活力のあるまちを

健幸都市宣言をふまえ、子どもからお年寄りまで運動に親しみ、地域も人も輝く活気あるまちづくりを推進し、地域の特色を生かした産業の振興・発展をめざします。

